

秀 賞



本気の挑戦

青森県三沢市立第一中学校

三年 齋藤 快

「すべてを出し切ろう。」そう、僕は心に決めていた。僕は幼稚園に通っているころからそろばんを習っている。小学生になると大会にも出場し、全国の大いでも入賞できるようになった。現在、僕は中学三年生であるが、今までそろばんを続けてきて一番に残っている出来事は昨年、中学二年生のときの東北大会だ。

東北大会は、東北六県に新潟県を加えた七県が参加する。その中でも青森県は強く毎年多くの入賞者や優勝者を輩出している。僕は青森県代表の一人で東北大会優勝に向けて練習を頑張っていた。しかし、優勝は簡単にはできるものではない。同じ青森県に四人のライバルがいるからだ。そのうち三人は三年生で東北大会に出場するのは今回が最後だった。そのため練習の点数もよく、それに比べ僕は思った通りの結果が出ていなかったたので、相当焦っていた。そろばんの先生にも怒られ、辛いこともあった。しかし、それは先生が自分のことを気遣っていることだと気づき、また頑張ろうと気持ちを入れなおした。でも、それでも調子が上がってこない…。本番二日前まで点数は悪いままだった。しかし、もう今日しかチャンスはない、という気持ちで臨んだ前日練

習で三回中二回満点をとることができた。

「自信をもって頑張ろう。この大会が最後の三人を倒して優勝しよう。」強い意志をもち、大会に向かった。

そして大会本番、最初の掛け算。一問でも間違えれば優勝はない。涼しい会場の中でも、汗が止まらない。次の割り算は難なく解けた。そして、最も苦手な三種目めの見取り算。見直しまで、絶対に気を抜くことはできない。四種目めの暗算、五種目めの応用計算もうまく解くことができ、自信をもって競技を終えることができた。あとは結果を待つだけ。ところが、昼休み前に突然アナウンスがかかった。

「中学生の部に満点の選手が複数いるため、決勝を行います。」

緊張しながら、僕は自分の名前を呼ばれるのを待った。自分の名前が呼ばれた。そしてライバルたち四人の名前も呼ばれたのだ。五人もの満点者が出たため会場はどよめいていた。東北大会初の出来事だったそうだ。僕は、驚きとともにうれしさがこみ上げてきた。今まで六年近く一緒に戦ってきたライバルたち。あまり話したことはなかったが、そろばんを通してぶつかり合った、ライバルであり、仲間でもある人たちとこうして競える決勝。こんな機会を得たことを本当にうれしく感じていた。「すべてを出し切ろう。」そう思い、スタートを待っていると、不思議に落ち着いてきた。

「よいい、始め！」の合図で全員が一斉に計算を始めた。スピードを出しつつもしつかり正答しなければならぬ。緊張で手が震え、頭が真っ白になりかける。「ハイ！」と一番に挙手したのは僕だった。一番に挙手できてうれしかったが、正解でなくては…。

決勝が終わる、昼食後に迎えた結果発表。下の順位から呼ばれてくる。次々に呼ばれる選手たちに拍

手を送りながら、自分の名前がまだ呼ばれないことを必死で祈っていた。三位と二位の選手が呼ばれるのを「自分の名前を呼ばないで！」そう思って聞いていた。そして、最後に名前が呼ばれた。

「二位、齋藤快選手、青森県。」

今までのそろばん人生で最高の瞬間だった。この大会で本当に今まで本気でそろばんを続けてきて良かったと思った。そろばんをやっていたいなかったらこんな素晴らしいライバルたちには出会えなかった。こんなうれしい経験もできなかった。そして、全国で活躍できるほどまでに育ててくださった先生には感謝の思いを伝えたい。

僕はそろばんを通して切磋琢磨し、向上する精神と感謝の気持ちを知ることができた。すばらしい出会いも経験できた。そしてこれからもそろばんを続け、全日本選手権大会で満点をとって優勝するという新たな目標もできた。

これからも僕の「本気の挑戦」はまだ続くのだ。